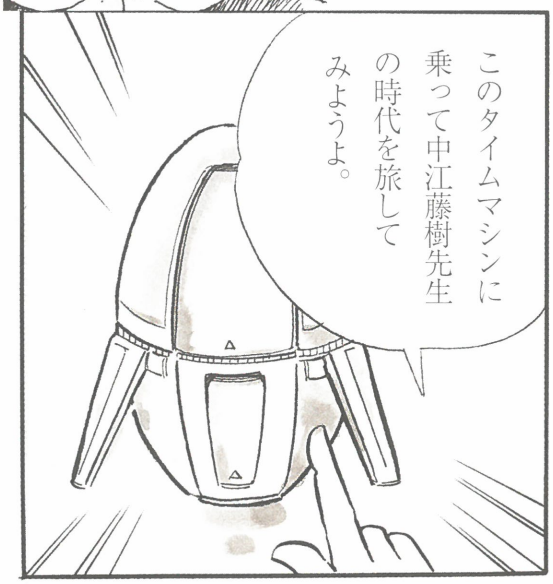
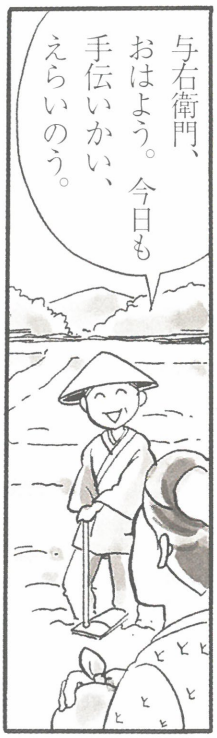
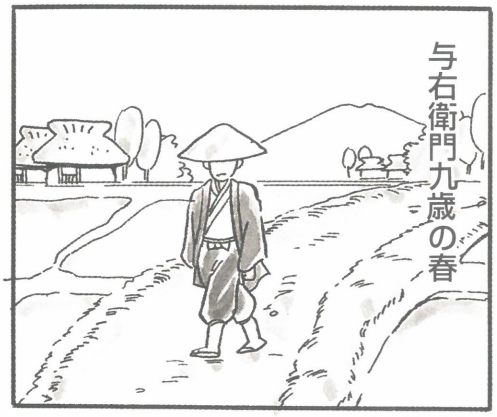
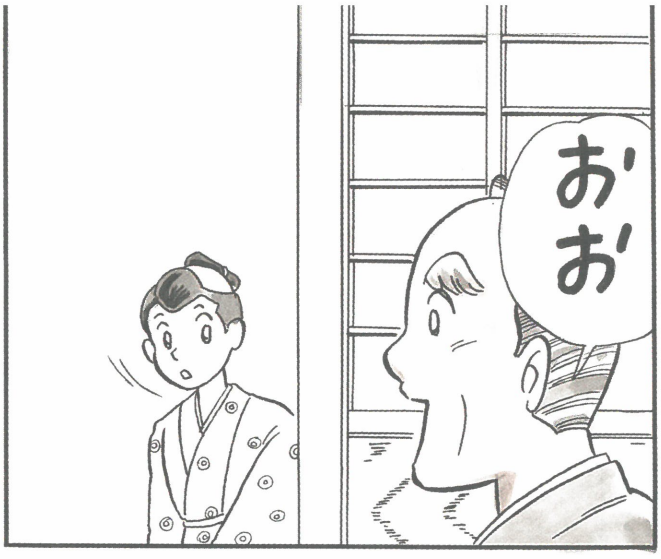
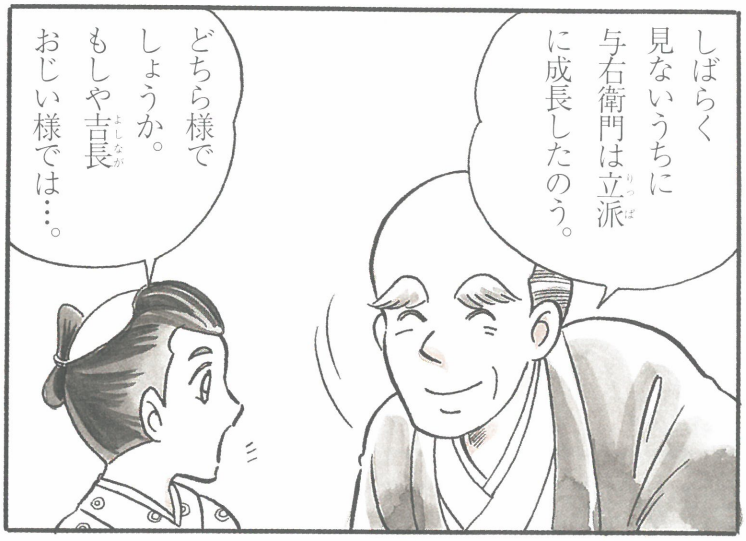
中江藤樹（なかえとうじゅ）



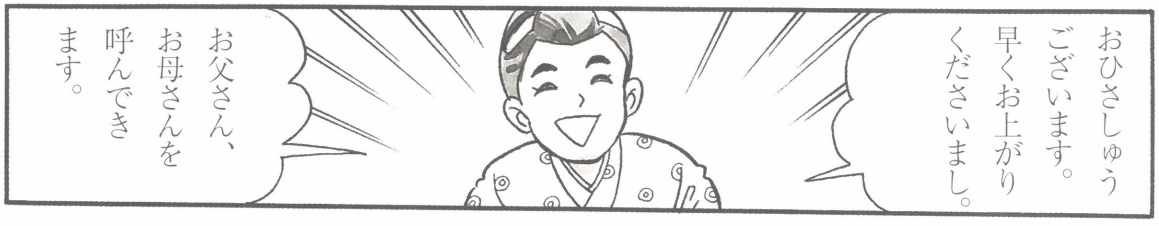



与右衛門九歳の春


おお


しばらく見ないうちに与右衛門は立派に成長したのう。
どちら様でしょうか。もしや吉長おじい様では…。

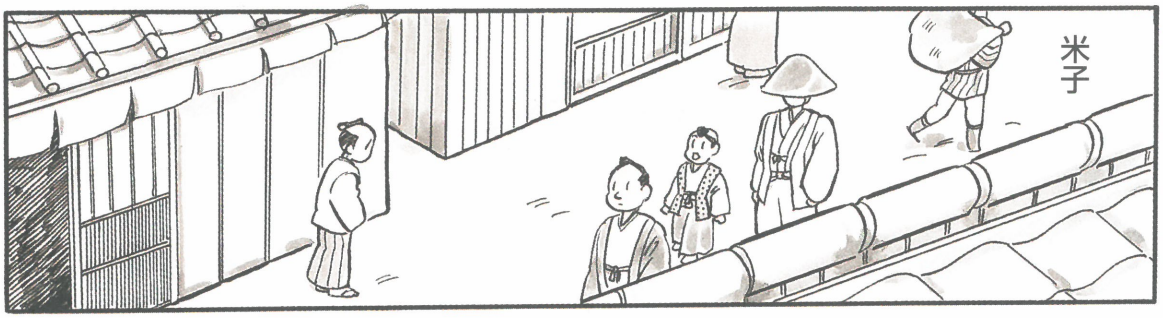
そうじゃ。六年ぶりだというのに覚えていてくれたか。

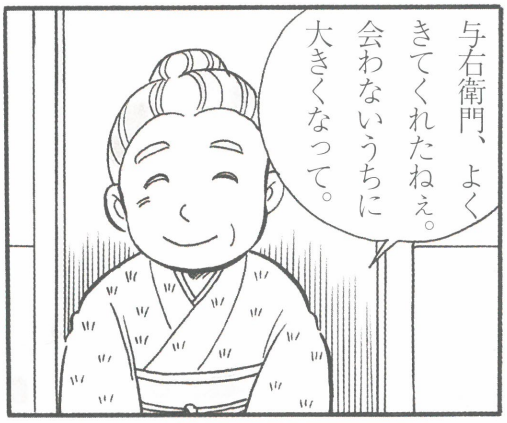

おひさしゅうございます。早くお上がりくださいまし。
お父さん、お母さんを呼んできます。

みんなと一緒に食べる夕食はうまいのう。

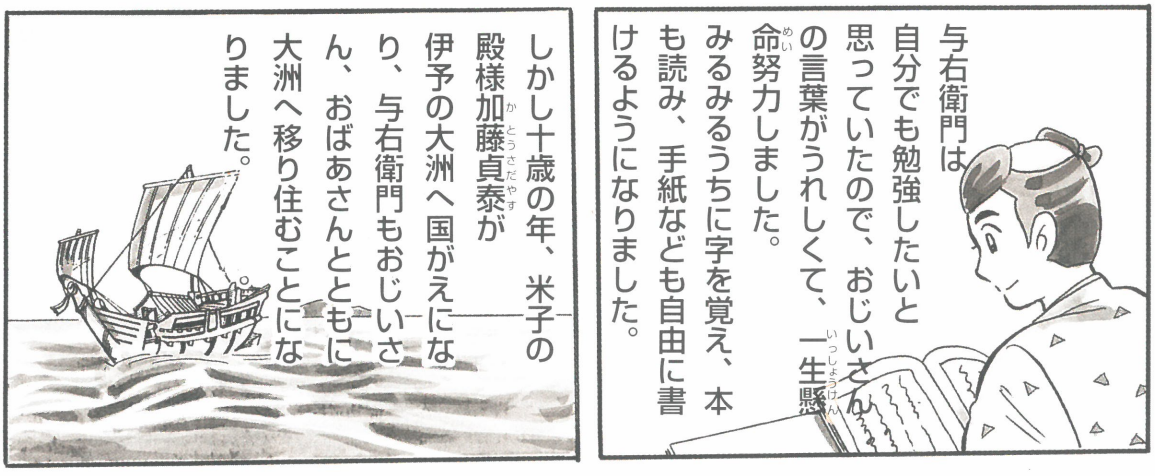
与右衛門はなかなか物覚えがいい。この子は勉強させたら立派な人になるだろう。
ありがとうございます。

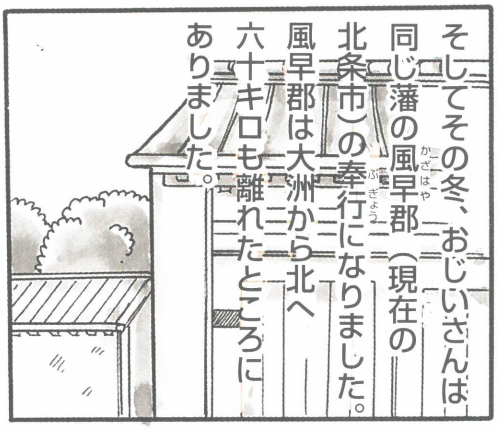
吉次、農業も立派な仕事だが、与右衛門を武士にして私の後をつがせたい。どうだ、米子へ連れて行って学問をさせることにはなるまいか。
えっ。
…与右衛門は私たちの一人息子ですし、つろうございます。しかし、このまま田舎においていたのでは平ぼんな一生で終わるかも知れません。
…わかりました。この子に人よりすぐれたところがあるのならおじい様のところで学問をさせてください。
どうかこの子の力を伸ばしてやってください。
九歳の年、与右衛門は祖父といっしょに遠い米子の町へと旅立ちました。
お父さん、お母さん、行って参ります。
おじい様のもとでしっかりと勉強をして、立派な人になっておくれ。
はい、がんばります。
僕らもお父さんやお母さんとはなれて暮らせるかな。…僕はできない。

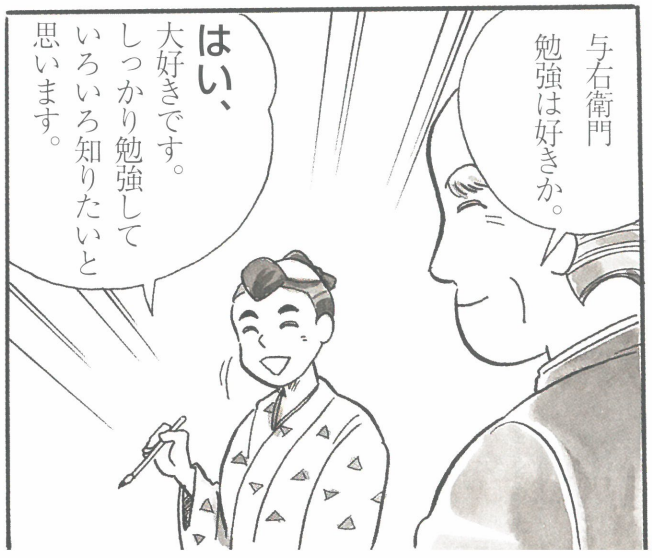

米子

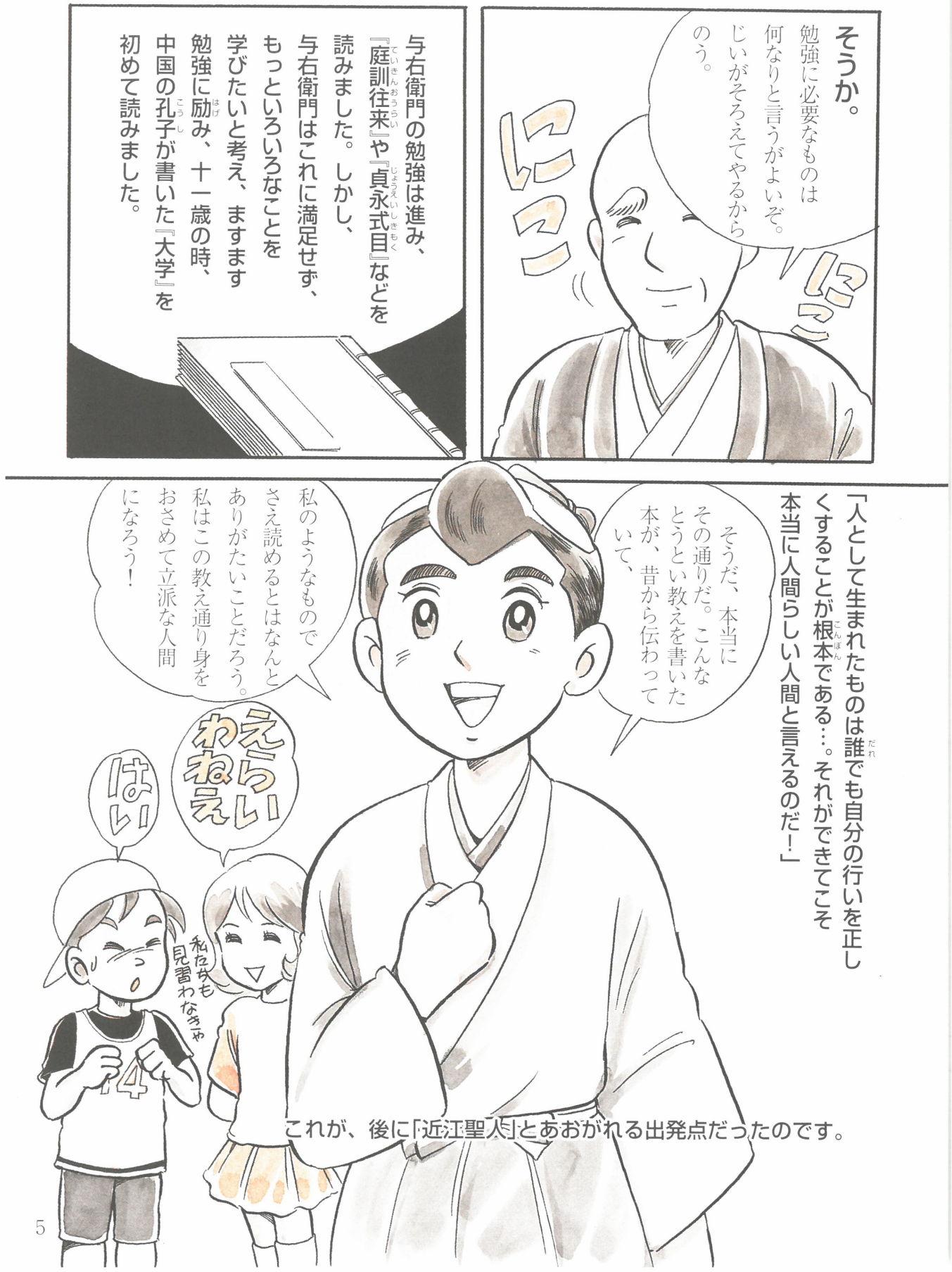

与右衛門、よくきてくれたねぇ。会わないうちに大きくなって。

これからの武士は、武芸だけでなく、字を習い、本を読み、人の道を学ばなくてはならん。お前はかしこい子だから、学問もできるはずだ。しっかりやっておくれ。


与右衛門は自分でも勉強したいと思っていたので、おじいさんの言葉がうれしくて、一生懸命努力しました。みるみるうちに字を覚え、本も読み、手紙なども自由に書けるようになりました。
しかし十歳の年、米子の殿様加藤貞泰が伊予の大洲へ国がえになり、与右衛門もおじいさん、おばあさんとともに大洲へ移り住むことになりました。


そしてその冬、おじいさんは同じ藩の風早郡（現在の北条市）の奉行になりました。風早郡は大洲から北へ六十キロも離れたところにありました。


与右衛門勉強は好きか。
はい、大好きです。しっかり勉強していろいろ知りたいと思います。


そうか。
勉強に必要なものは何なりと言うがよいぞ。じいがそろえてやるからのう。
にこ
にこ
与右衛門の勉強は進み、『庭訓往来』や『貞永式目』などを読みました。しかし、与右衛門はこれに満足せず、もっといろいろなことを学びたいと考え、ますます勉強に励み、十一歳の時、中国の孔子が書いた『大学』を初めて読みました。
「人として生まれたものは誰でも自分の行いを正しくすることが根本である…。それができてこそ本当に人間らしい人間と言えるのだ！」
そうだ、本当にその通りだ。こんなとうとい教えを書いた本が、昔から伝わっていて、
私のようなものでさえ読めるとはなんとありがたいことだろう。私はこの教え通り身をおさめて立派な人間になろう！
えらいねえ
はい
私たちも見習わなきゃ
これが、後に「近江聖人」とあおがれる出発点だったのです。

十三歳の冬、
おじいさんに連れられ、
風早郡からまた大洲へ
帰りました。

カポ
カポ

しかしその年、
九歳からいつくしみ育
ててくださった
おばあさんが
亡くなってしまい
ました。

おじいさんと与右
衛門にとっては大
変悲しい出来事で
したが、それでも
与右衛門はおじい
さんをいたわりな
がら勉強を続けま
した。

明くる年のこと

与右衛門、
そちもいよいよ元服じゃ。
これからは
じいとも別れて一人で
暮らすことになる。
覚悟はできているで
あろうのう。

はい、おじい様。覚悟はできております。ただ、おじい様のお世話ができなくなるのが気がかりでなりません。

何を言っている。わしのことなど心配はいらん。それよりもそちの元服を考えるとうれしゅうてならんわい。

おじいさんは与右衛門の元服がうれしかったのか、武士の心構えをこまごまと教えたり、学問のために本や道具もそろえてくれました。

おじいさんの励ましに感激した与右衛門はいっそう武芸の練習に励むとともに、学問を深めました。

ところがこの年、おばあさんの後を追うように、おじいさんも亡くなり、与右衛門は遠くふるさとから離れた大洲の地に一人残されてしまったのでした。

かわいそう、与右衛門さん…。

ひとりになってしまったけれど、おじい様、これからもおじい様の教えを守り、もっと学問に励んでまいります。見守っていてくださいね。

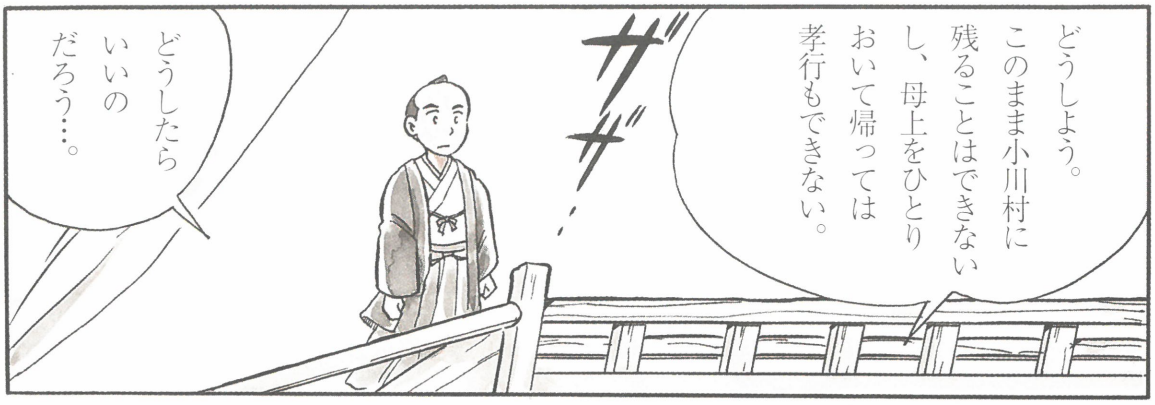
十八歳の春、小川村から悲しい知らせが届きました。父上が亡くなったのです。

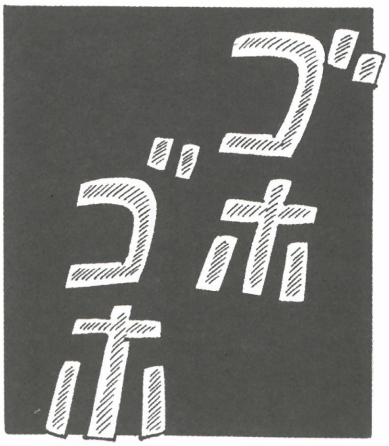
また一人大切な人を亡くしてしまった。母上はどうしておいでだろう。

ひとりぼっちになっておさびしいだろう。おそばにいてなぐさめてあげたい。

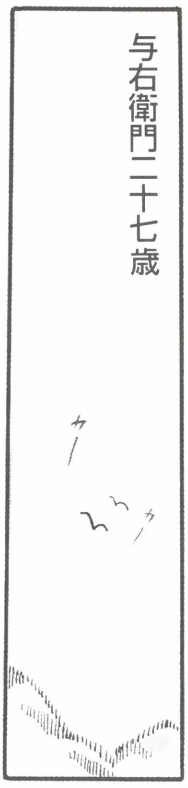
与右衛門は学問を深め、武芸に打ち込む中、殿様に小川村へ帰り、父上の墓参りができるようお願いし続けました。
やっとおゆるしがでたのは二十二歳の時でした。
父上、これからは私が父上に代わって母上を守ってまいりますので、ご安心ください。
しかし、与右衛門は、殿様に仕える身、すぐに大洲に戻らなくてはなりません。
さみしそうな母の姿に心を残しながら、帰りを急ぎました。

そうだ
……
母上を大洲へ
お連れし、いっしょに
暮らそう。
そうしたら毎日
親孝行もできる！
二十五歳の春、殿様から
おひまをいただいた
与右衛門は喜んで
小川村へ帰りました。
いっしょに暮らそう
という気持ちはありがたい
けれど、私はこの土地を
はなれることはできません。
ごせんぞ様のお墓のある
この村にいたいのです。
大変うれしいけれど、
大洲に行くことだけは
年よりのわがままだと思って
許しておくれ。


どうしよう。このまま小川村に残ることはできないし、母上をひとりおいて帰っては孝行もできない。
どうしたらいいのだろう…。

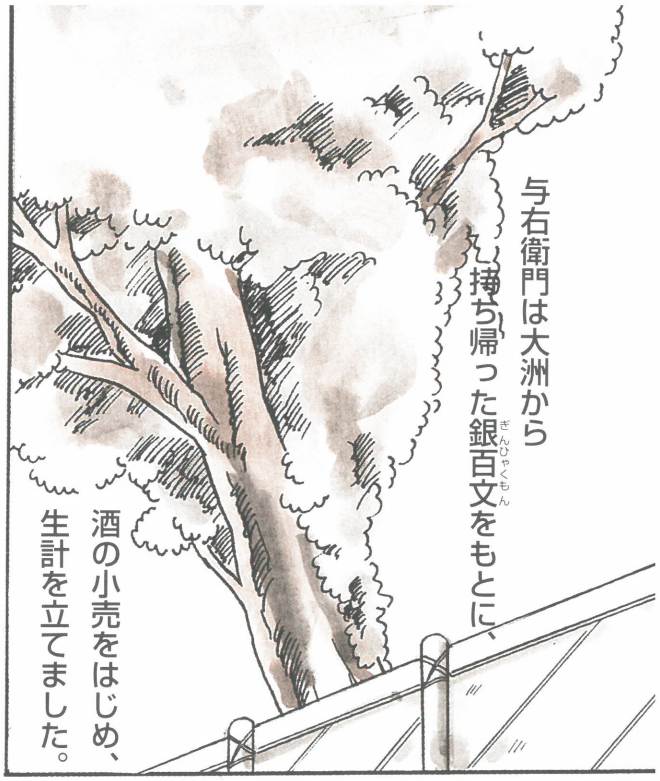

ゴボゴボ

与右衛門は大洲へ帰る船の中で、ぜんそくにかかりました。
私はこれからどうしたらいいのだろう。


与右衛門二十七歳

母上は今どうしておられるだろう。ひとり農業をしておられる母上を見すてるわけにはいかない。
近江へ帰って母に孝行をつくさねば…。

与右衛門は殿様におひま願いを出し、大洲を立ち去ることにしました。


与右衛門は大洲から
持ち帰った銀百文をもとに、
酒の小売をはじめ、
生計を立てました。

そして
ひまを見つけては
村の人々に
書物の講義を
しました。

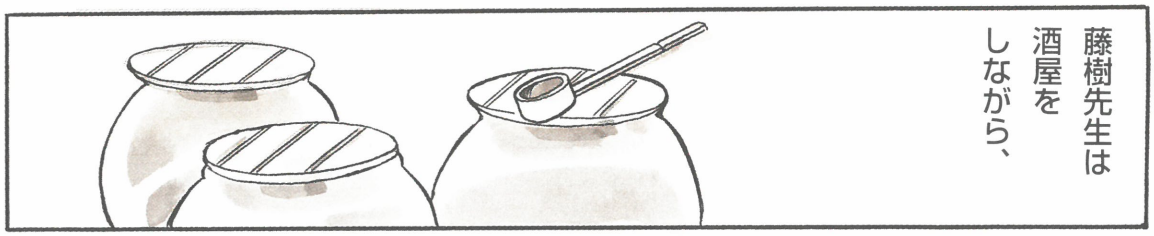
お母さんも
うれしそうだね。
与右衛門さんは、
働き者だな。

「かめにある酒は自分で
量って持って行ってください。代金はめいめい
この竹づつに入れておいてください。」

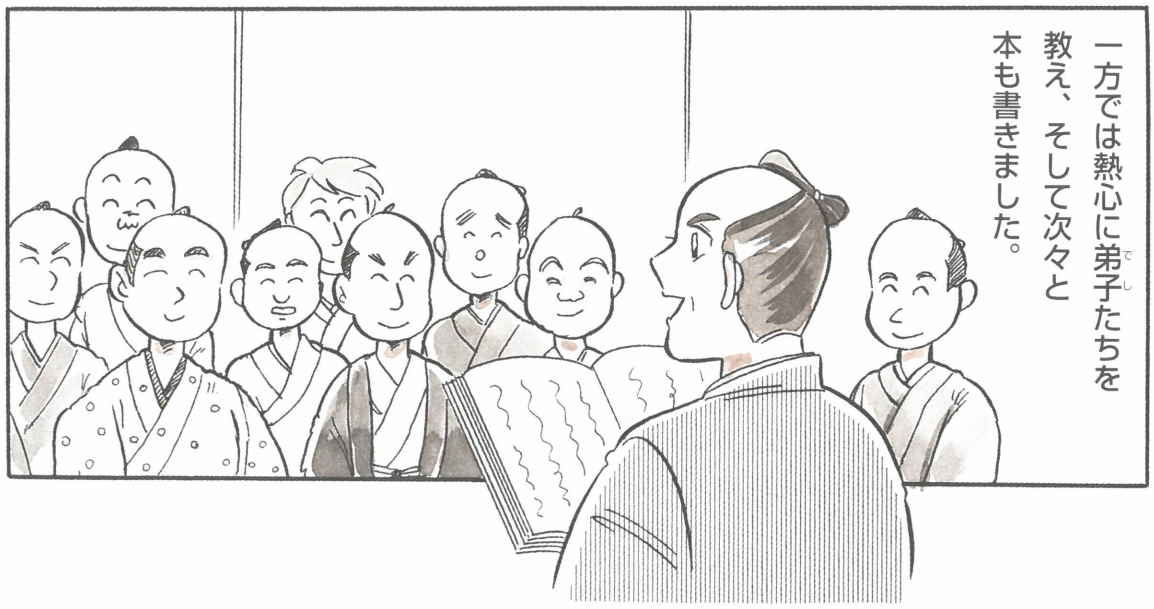
先生、
こんなことで
まちがいは
おきない
ですか。
人間は
みんなよい人
なんだ。
悪いことをする
はずはないよ。
だいじょうぶで
すよ。
アハハ
与右衛門が言う通り、
毎日夕方になって
調べてみると代金は
まちがいなく
きちんと竹づつに
入っていました。

そうした与右衛門の行いや
言葉から人々は与右衛門のことを
「先生」としたうようになりました。

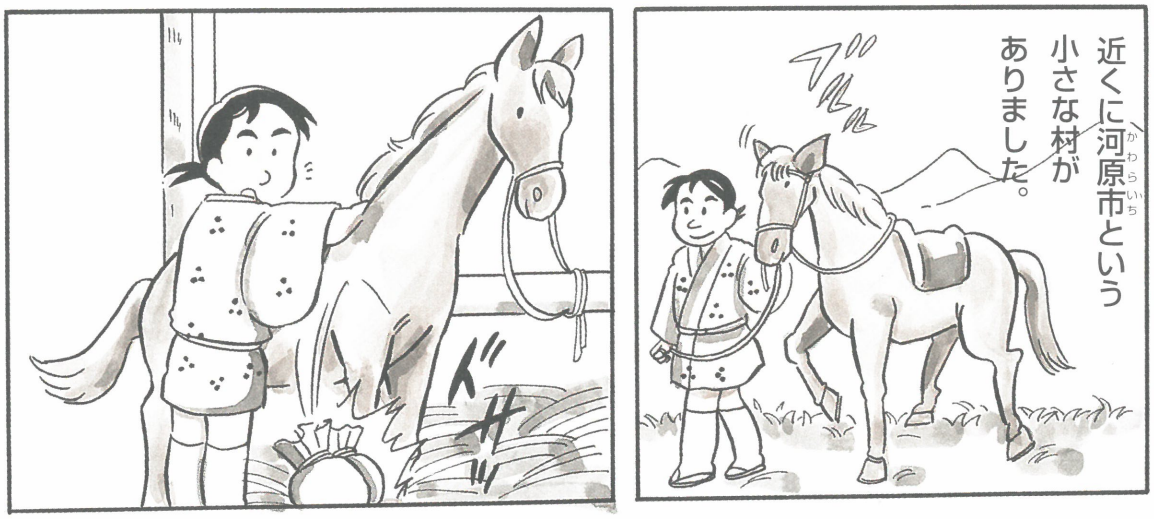
そして家の前に大きな
藤の木があったことから、
いつの間にか「藤樹先生」と
呼ばれるようになりました。

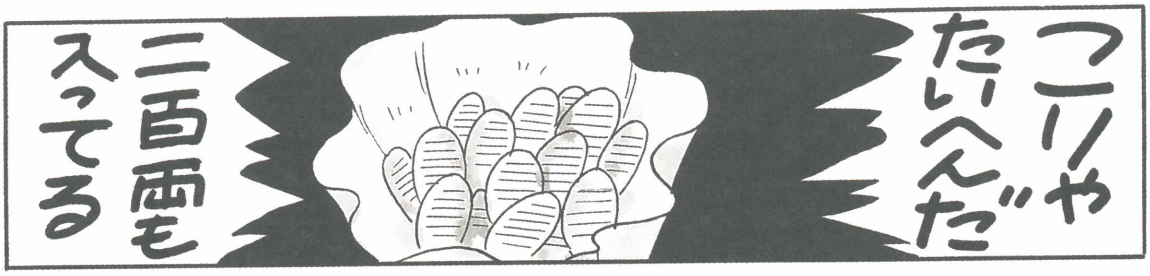


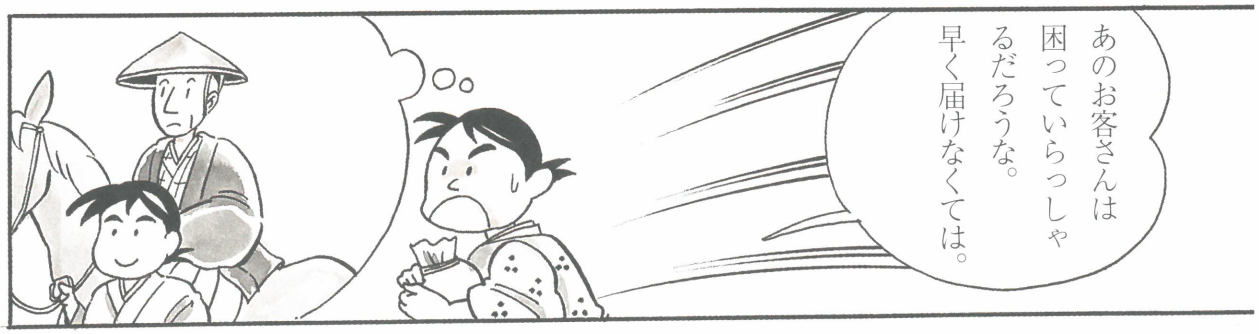
藤樹先生は
酒屋を
しながら、



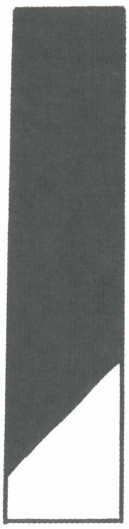
一方では熱心に弟子(でし)たちを
教え、そして次々と
本も書きました。


近くに河原市という
小さな村が
ありました。


こりゃ
たいへんだ
二百両も
入ってる


あのお客さんは
困っていらっしゃ
るだろうな。
早く届けなくては。

又左衛門はひと休みもしないで、
榎の宿まで走りました。
三十キロもある
夜道を走り続け
ました。



二百両は加賀藩から
おあずかりしたご用金。
大切なご用金を無くしては
自分の命がなくなるばかり
か、家族のものまで重い
罪に問われる…。

ガタン
はあ
はあ
はあ
ありがたい。なんとうれしいことだろう。家の子供たちにどうわびようかとそればかり考えていました。こんなにうれしいことはありません。
これは私の気持ちです。十五両あります。どうか、お礼に受け取ってください。
めっそうもございません。私はただ持ち主にお返ししただけです。
それでは私の気がすみません。

それほど
おっしゃるのなら
この街道の往復
のだちんとして
二百文だけ
いただきましょう。
この二百文で
宿の人たちと
いっしょに飲み
よい気持ちで
帰れます。
エヘッ
あなたほどよくの
ない人も珍しい。
あなたはどこの
どなたでござい
ますか。
私は名もない
馬子です。
ただ、私の近くの
村に藤樹先生という
偉い先生がおられます。
その方は大勢の弟子に毎
日学問を教えておられま
すが、
私たち農民や
馬子にもお話をして
くださいます。
「親には孝行をし、
自分の仕事は大事に
し、人のためになる
行いをするように。」と言わ
れています。その言葉の
ようにあなた様のお金を
返しに来ただけです。

宿の人々は村に悪い人がひとりもいないということを聞いて、藤樹先生のえらさに感心し、小川村の人たちの心の美しさに感動しました。

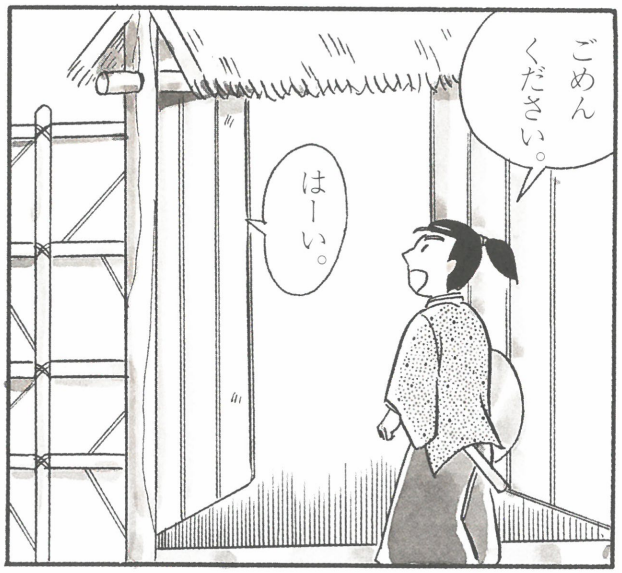
私たちも感心してしまうわね。

いい時代だなぁ。

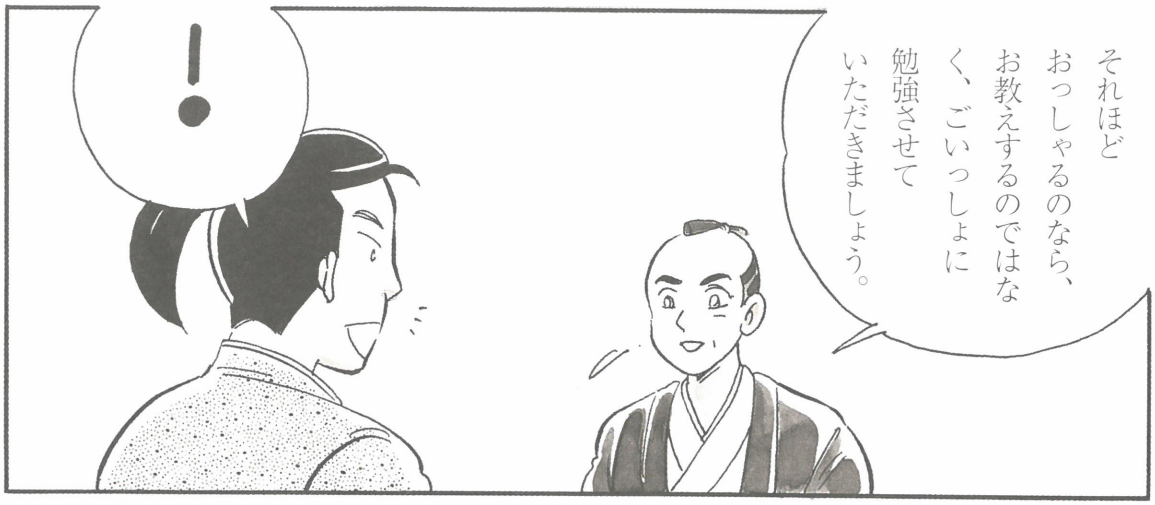
このとき、近江の桐原村という所に住んでいた熊沢蕃山という人も話を聞いていました。

熊沢蕃山は備前（現在の岡山県）の殿様、池田光政に仕えていた武士です。

蕃山は又左衛門の話を聞き、「よほど偉い先生に違いない。」と、さっそく小川村をたずねました。

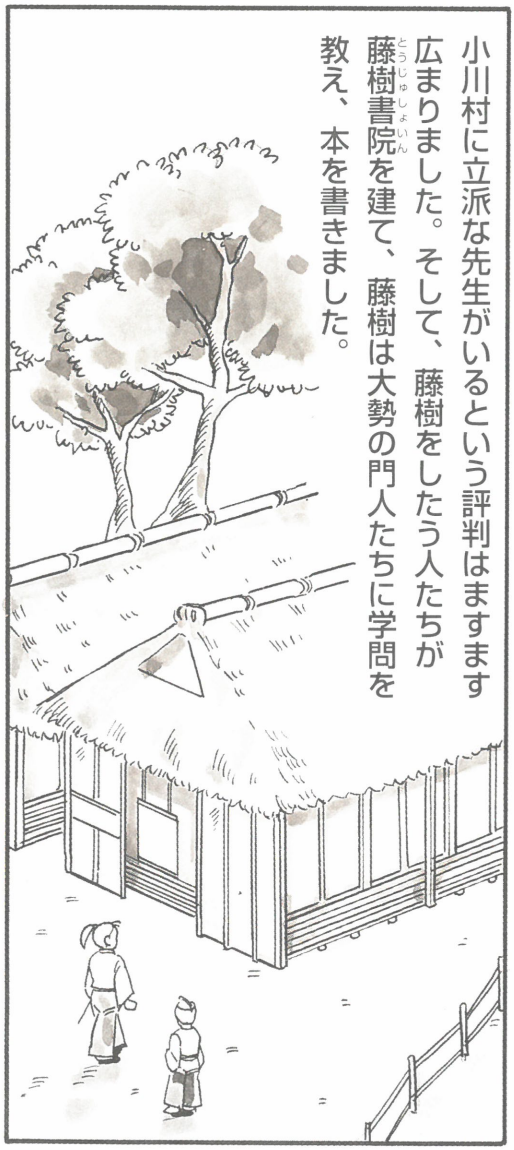


あなたが藤樹先生ですか。先生にお目にかかり、ぜひ教えを受けさせていただきたくお願いに参りました。
ぐうぜん馬子の話を聞き、その時思ったのです。
何とか弟子にしていただけませんでしょうか。
先生の教えを政治の上に生かしたいのです。
熊沢どの、私はまだまだみじゅくです。あなたをお教えするほどの学問も徳も力もありません。
どうかお引きとりください。
どうか
・・・・・

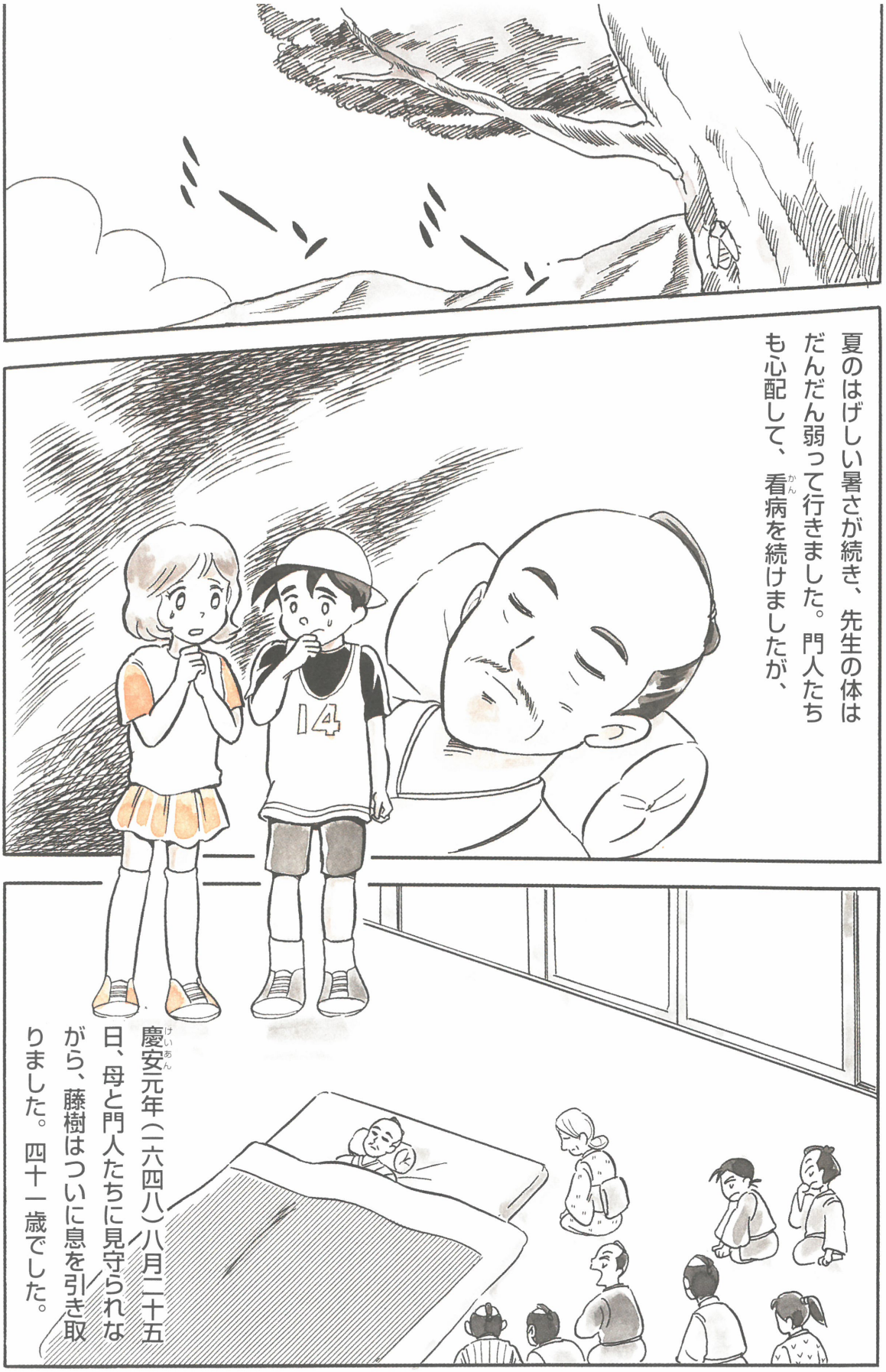

それほどおっしゃるのなら、お教えするのではなく、ごいっしょに勉強させていただきましょう。
！

蕃山は藤樹の教えを受けることになりました。わずか八ヵ月ではありましたが、蕃山は真剣に学び、勉強はめきめき進みました。

その後蕃山は再び池田光政に仕え、山に木を植えたり、堤防を築いたり藩校を建てるなど、学問を実際の政治の上に生かすことに努めました。

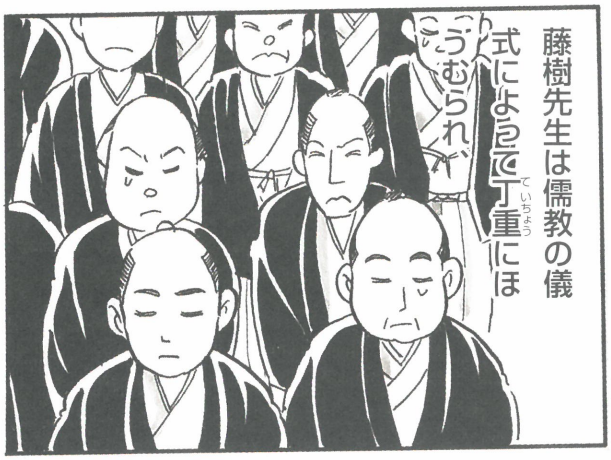

小川村に立派な先生がいるという評判はますます広まりました。そして、藤樹をしたう人たちが藤樹書院を建て、藤樹は大勢の門人たちに学問を教え、本を書きました。

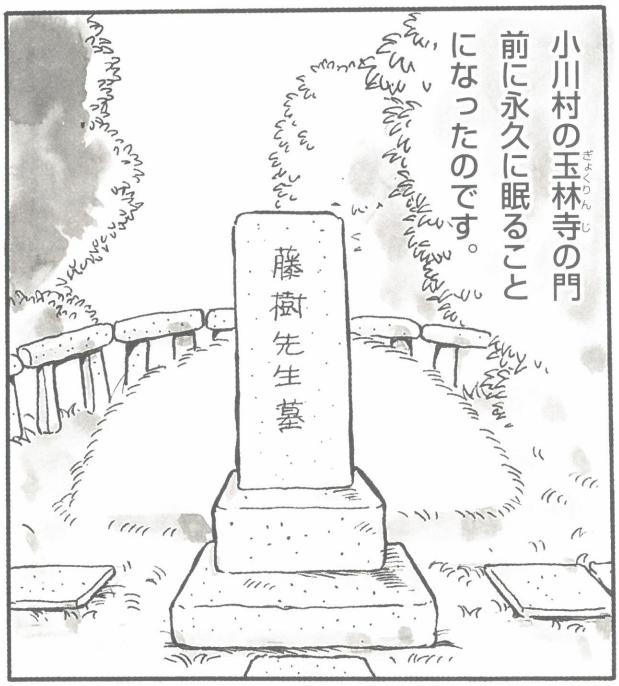
藤樹の身にまた持病であるぜんそくがおきました。
ゴホ・・・
ゴホ
ぜんそくはだんだんひどくなり、無理を重ねていた藤樹の体はどんどん弱って行きました。
藤樹はせきのひどい時は枕をいくつも重ねてたえておりました。
ゴホ・
だいじょうぶかしら。
心配だね。
気分はどんな具合ですか。
母上、今日は少しよいようでございます。もうすぐよくなりますよ。

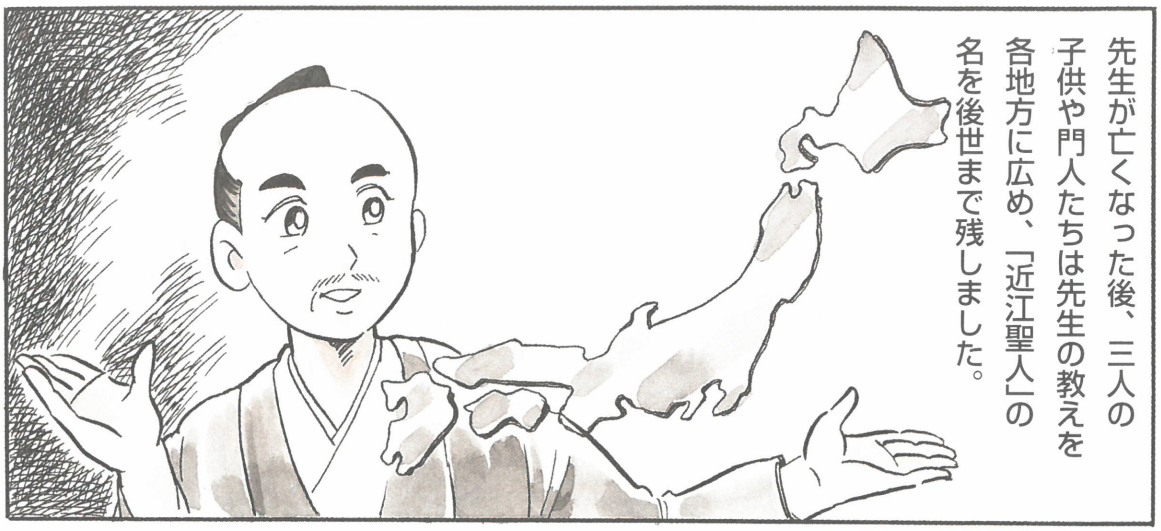

夏のはげしい暑さが続き、先生の体はだんだん弱って行きました。門人たちも心配して、看病を続けましたが、
慶安元年（一六四八）八月二十五日、母と門人たちに見守られながら、藤樹はついに息を引き取りました。四十一歳でした。

最後の藤樹の言葉は「私の命は終わろうとしている。私が死んだ後、私の学問をたのむ。」でした。

先生が亡くなったという知らせが伝わると、先生の教えを受けた門人や徳をしたって集まった人たちは、親を亡くしたようになげき悲しみました。

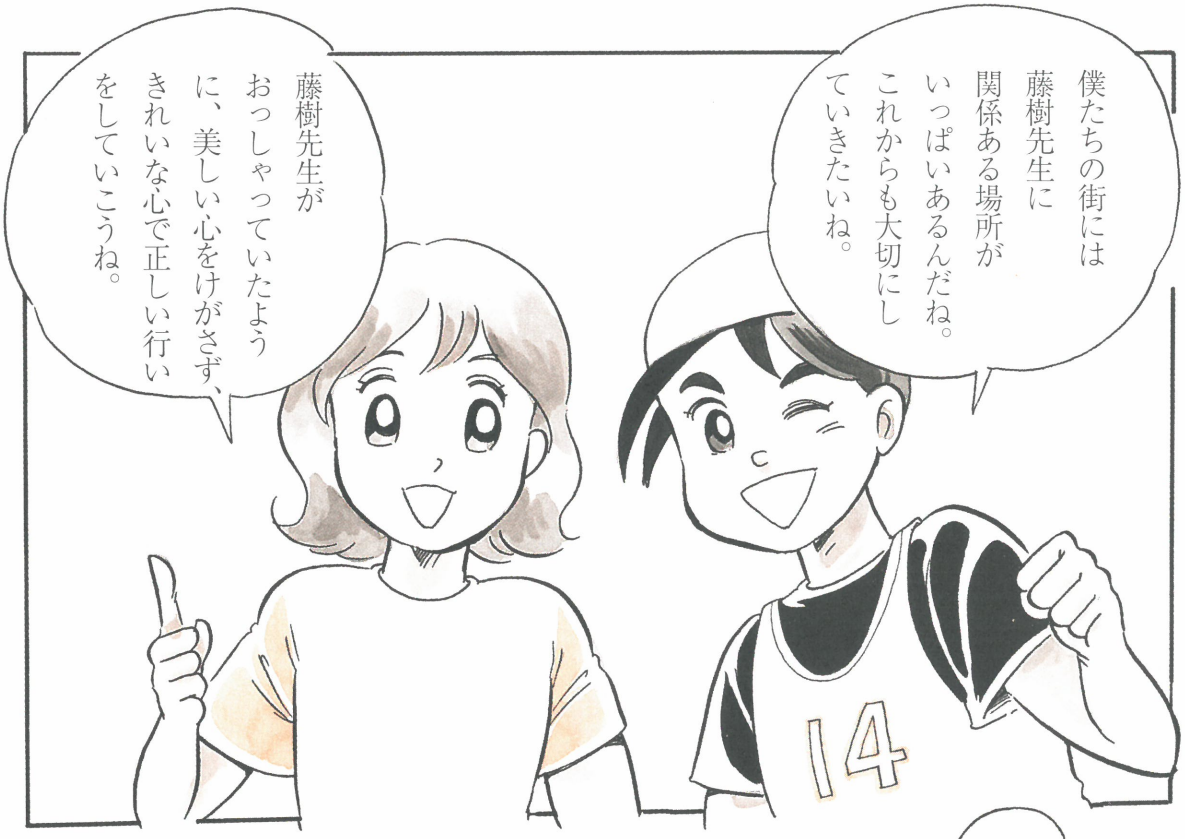

藤樹先生は儒教の儀式によって丁重にほうむられ

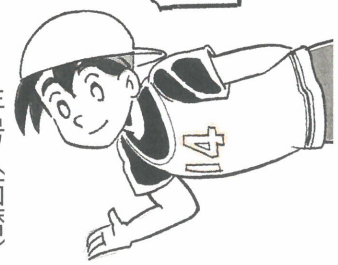

小川村の玉林寺の門前に永久に眠ることになったのです。
藤樹先生墓


先生が亡くなった後、三人の
子供や門人たちは先生の教えを
各地方に広め、「近江聖人」の
名を後世まで残しました。

藤樹書院の庭にある
藤の木はますます大きくなり、
美しい花を今でも咲かせています。

株分けされた藤は、
大洲の地でも見事に
生長し、藤樹先生が
住んでいた屋敷あとの
大洲高等学校や大洲城跡、
大洲小学校の庭にも
毎年美しい花を咲かせ、
見る人の心にうるおいを
与えています。





中江藤樹年譜

年号（西暦）	主な事がら
慶長十三年（一六〇八）	近江の国小川村（現在の滋賀県安曇川町）に三月七日、生まれる
元和二年（一六一六）	おじいさんに連れられて、米子へ移る
元和三年（一六一七）	おじいさんと共に大洲へ移る
元和四年（一六一八）	『大学』という本を読み、志を立てる
元和七年（一六二一）	天梁和尚について詩や書を習う
元和八年（一六二二）	元服を迎える
寛永四年（一六二七）	初めて門人に『大学』を教える
寛永九年（一六三二）	大野了佐が教えを受ける
寛永十一年（一六三四）	小川村へ帰る
寛永十四年（一六三七）	高橋久子と結婚
寛永十八年（一六四一）	熊沢蕃山が門人となる
正保三年（一六四六）	妻久子亡くなる
正保四年（一六四七）	別所布里と再婚
慶安元年（一六四八）	八月二十五日の朝亡くなる（四十一歳）